



越中和紙

手仕事の、ぬくもりを伝える。



富山県推奨
とやまブランド

厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山県」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド
「越中和紙」認定事業者

富山県和紙協同組合
富山市八尾町鏡町668-4 TEL.076-455-1184
<http://etchu-washi.jp>



人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語 VOL.18

富山県 地域振興課
TEL.076-444-3114 <https://www.toyama-brand.jp/>

冬の白さが、

楮こうぞを白くする。

「山里に伝わる昔ながらの和紙」

世界遺産合掌造り集落で知られる五箇山ごかやまの一角、南砺市東中江地区ひがしなかえ。きびしい寒さと深い雪に覆われる12月から3月にかけて、山里の田畑に積もった雪の上では、真冬の貴重な晴れ間をぬって「雪さらし」が行われる。

雪さらしは、和紙の原料となる楮こうぞを漂白する作業。表皮をはぎ取った楮の束を雪の上

に広げて1〜2週間さらすと、水気と紫外線の働きで色素が抜け、白い繊維となる。

漂白剤などの力を借りず、自然の力だけで色を抜く雪さらしは手間のかかる作業。国内ではわずか3〜4か所しか行われていない雪国独特の技法だ。

「手間はかかりますが、繊維を傷めることがないので丈夫で長持ちする紙になります」
そう話すのは、東中江和紙

加工生産組合の宮本友信とものぶさん。

雪さらしした楮で漉いた和紙は、生成りの柔らかな白さが特徴で、年月を経るほどその白さを増す。天然楮の太く長い繊維が絡みあうことで生まれる強いコシが、「千年もつ」と言われるほどの耐久性を生むのだという。

「昔と何ひとつ変わらないやり方で漉いた、昔ながらの和紙です」と、宮本さんは誇らしげに話す。

「越中は国内で最も古い和紙産地」

越中——現在の富山県は、わが国で最も古い和紙産地のひとつだ。奈良時代の正倉院文書『図書寮解しよしょくかい』や平安時代の『延喜式えんぎしき』にも、

越中国の紙が都へ納められたとの記録が残る。

富山県内の和紙産地、八尾やっお（富山市）、五箇山ごかやま（南砺市）、蛭谷むしだん（朝日町）で漉かれる和紙は「越中和紙」と総称され、1984（昭和59）年には国の伝統的工芸品に指定されている。

どの産地も県内の山あいには位置し、原料となる楮が育ちやすい自然に囲まれている。また、良質の水が豊富にあると



塵取り＝解した楮の繊維から小さなゴミを寄り分ける



雪さらし＝晴れ間を見て天地返し作業をする宮本友信さん

いう、紙漉きには良い条件も揃っている。かつて紙漉きは、養蚕や炭焼きと並んで、雪にとざされる冬場の貴重な収入源にもなっていた。

「越中和紙の歴史は、山里に生きる人々が何代にもわたって受け継いできた手仕事の歴史です。古くは寺社や役所などの記録用紙として、また障子や襖ふすまなどの材料として用いられ、生活に深く溶けこんで重宝されてきました」。

こう話すのは、越中和紙の生産者でつくる富山県和紙協同組合の吉田泰樹やすき理事長。

「産地ごとに特色があり、古典的な和紙から和紙加工品まで、多彩な和紙があるのも越中和紙の魅力です。いずれの和紙も楮を主原料としており、素朴で暖かみを感じさせる風合いが越中和紙の持ち味となっています」。

手間をかければ、
かけたぶんだけ
いい紙になる。



糊置き＝图案が彫りこまれた型紙の上からヘラを使って糊を引く



流し漉き＝溶けた繊維が絡み合って紙となるまで作業を何度も繰り返す

に和紙の需要は減少し、昭和前期には八尾和紙の生産者も大きく数を減らした。その中で桂樹舎は、水に強く、濡れても破れにくい八尾和紙の特徴をいかした「型染め」の加工紙に活路を見出した。吉田さんは桂樹舎の歴史を振り返る。「創業者である父桂介は、柳宗悦が提唱した民藝運動に関わり、多くの知己を得ました。後に人間国宝となる染色工芸家の芹沢銈介氏もその一人。芹沢さんは、水洗いにも耐える八尾和紙に興味を持ち、布のように染めたら面白いものができるかと父に勧めたのです」。

模様を切り抜いた型紙を和紙にのせ、もち米と米ぬかを混ぜた糊をひく。糊が乾いたところへ顔料をのせると、糊のない部分に色が染みこみ、糊の部分は白く染め抜かれる。

さらにはデザインに応じて色を重ね、最後に水に浸して糊を洗い落とす。

型染めのデザインの多くは、先代桂介さんが手がけたオリジナル。芹沢銈介デザインによるカレンダーの復刻版も根強い人気がある。半世紀以上も前に生まれたデザインだが、鮮やかな色彩とモダンな図柄は今も新鮮だ。

「紙漉きから染色まですべてが手仕事。均一に仕上げようとしても、風合いや色味には微妙な違いが生まれます」。手仕事ならではの和紙の味わいを大切に守っていきたいと吉田さんは話した。

地染めした和紙に色を加えて表情を生む



「多彩なデザインの型染め和紙」

「おわら風の盆」で知られる八尾町。この町でただ一軒、紙漉きの伝統を今に受け継ぐのが桂樹舎だ。前出の吉田泰樹さんは桂樹舎の代表も務める。八尾和紙は富山売薬とともに発展した歴史を持つ。もとは富山城下に納める障子紙、提灯紙などの生産から始まったが、富山売薬が起ころ

た江戸時代中期から、売薬に用いられる。薬袋紙、膏薬紙、懸場帳、配置先への土産用の版画紙などの生産が急増。「八尾山村千軒、紙を漉かざる家なし」とまで謳われる産業に育った。やがて、洋紙の普及とともに

かじかむ手を、湯で温めながら紙を漉く。



吉田泰樹さん(富山県和紙協同組合理事長・桂樹舎代表)



落ち着いた生成りの色合いの「悠久紙」

【四季を通して 和紙と向き合う】

江戸時代、加賀藩の命により火薬の原料である煙硝えんしょうを生

産していた五箇山では、和紙もまた藩の手厚い保護を受けた重要な生産品のひとつだった。加賀藩の御料紙として採用された五箇山和紙は、藩の公文書などに用いられた。五箇山では現在、3軒の生産者が和紙づくりを営む。付近の山では原料となる楮の栽培が行われている。紙を漉く冬場だけではなく、春の施肥に草刈り、夏の芽かきや剪定、晩秋の刈り取りまで、四季を通して和紙と向き合う日々が続く。

前述の東中江和紙加工生産組合は「悠久紙ゆうきゅうし」を生産する。年月を経ても黄ばみや劣

年月を経ても、 その風合いは変わらない。

し、400年の歴史は途絶えることとなった。現在、地域の人びとが協力し、紙漉きの伝統を復興しようとする取り組みが始まっている。

【多彩な分野に 可能性が広がる】

越中和紙の各産地では、長い歴史に培われた技を受け継ぎながら、新たな商品開発や販路開拓にも挑戦している。

八尾町の桂樹舎では、型染めのデザインをいかした小物箱や名刺入れ、ブックカバー、御朱印帳といった和紙加工品を多彩にそろえる。

五箇山和紙では、ブランド「GOKKA」を立ち上げ、外部デザイナーを起用したモダンな商品ラインに挑戦中。五箇山和紙の里では、市松文様を基調にした雑貨ライン「ちんちろ」、カラフルな色彩が特徴のブランド「FIVE」を展開

化が少ない「悠久紙」は、桂離宮や名古屋城本丸御殿、成巽閣、勝興寺といった名だたる文化財の修復にも用いられている。農事組合法人五箇山和紙では、伝統的な手漉き和紙のほか、和紙を加工した民芸品を生産する。「紙塑人形」は、粘土状にした楮の繊維を固め、表面に和紙を貼って着色した手びねりの民芸品。豊かな表情と素朴さが土産品として人気を集めている。五箇山和紙の里は、1982(昭和57)年、和紙製品の開発と後継者の育成をはかる目的で設立された。昔ながらの障子紙、襖紙のほか、水墨画や版画の画材用紙、多彩な和

開している。

「和紙組合では、販路の開拓を目的に、伝統工芸品展やギフトショーといった展示会・見本市に積極的に参加しています。近年ではアレルやインテリアなどの分野でも、素材としての和紙が注目されています。越中和紙の可能性がますます広がっていくのが楽しみです」。

吉田理事長は、目を輝かせてそう話した。



上：型染め和紙から多彩な製品が生まれる
下：和紙のイメージを打ち破る「FIVE」

【関連施設】



和紙に関する歴史資料や世界の紙製品、民芸品を展示する紙のミュージアム。廃校になった山あいの分校を移築した展示館には、和紙製品のショップや民藝調のカフェも併設されている。予約すれば紙漉き体験も可能。

桂樹舎 和紙文庫

富山市八尾町鐘町668-4
JR高山線八尾駅よりバス10分
076-455-1184
10:00～17:00 (入館は16:30まで)
月曜日・年末年始・他



道の駅たいらを中心に、五箇山の歴史・自然・伝統工芸・食などをテーマとした複数の施設が集まる。和紙工芸館では五箇山和紙の歴史・技法・工程などを紹介。和紙体験館では、はがき作りなどの手漉き体験ができる。

道の駅たいら 五箇山和紙の里

南砺市東中江215
東海北陸道五箇山ICから20分
0763-66-2403
9:00～17:00
年末年始

message

富山の豊かさを凝縮したプロダクト

ナガオカケンメイさん
デザイン活動家



民藝運動の創設者である柳宗悦は、「その土地で取れる材料で作りたい」と言っています。上質な材料は厳しくも豊かな自然環境から生まれるもの。そこに出来れば訪ねたくなる観光要素や、デザイン的な視点や交流があるのが理想的で、越中和紙の山里には、それらが揃っています。僕も個人的に桂樹舎やFIVEなどの名刺入れを愛用しています。富山の豊かさを凝縮したプロダクトとして、使い込むほどにその風合いに富山を思い出します。



郷愁を感じさせる素朴な表情の「紙塑人形」